



山の自然学 岩波新書541

小泉武栄著 岩波書店、新書判、
232ページ、定価660円(税別)
ISBN4-00-430541-1

山の人気が続いている。この夏も多くの登山者が各地の山へ集まるものと予想されるが、彼らの中で山の自然の美しさの理由を考えたことのある人の割合はどれほどになるだろうか。

著者の一貫した研究姿勢とは、山の自然の主要メンバーである地質や地形、気候、動植物は一方向的に、あるいは相互に影響しあって存在しているから、個々の現象をミクロに捉えるのではなく、全体を大づかみに科学の対象とすることで事の本質を捉えようとするものである。本書は、こうした広い視点で日本の山の自然のしくみを説いたものである。著者が「新版・空撮登山ガイド」(山と溪谷社)に連載した科学コラムをもとに、本書では25の話題について北海道礼文島から南九州屋久島まで46の山または山地がとりあげられる。火山、溪流、氷河、永久凍土、雪田、湿原、風雨、岩石、地すべり、活断層、高山植物、森林と、日本の山で見られる多彩な自然現象が網羅的に扱われており、時間尺度も氷河期の始まりから現代までをカバーして50万年を超える。なるほど、日本の山の自然が複雑かつ繊細な歴史のうえに成立してきたことを読者は実感できるであろう。

本書の特徴として、写真や高山植物のスケッチの多用があげられる。逆に、難しい数式や統計表の類はまったく登場しない。また各々の話題はどれも適度な分量の平易な文で解説され、しかも個々の内容が独立して完結しているから、読者は自由なスタイルで読み進めることができる。こうした構成や内容が本書を馴じみやすいものになっていることは確かである。専門外の者には極端に難解な新書にときおり出会うが、本書は山の自然科学に初めて触れる人にも抵抗なく受け入れられるにちがいない。蛇足だが、こうしたことの表われか、本書は

1998年1月初版ののち、現在(同年4月下旬)も一部の書店で新書部門の売上げ上位10位以内に食いこむ力強さをみせていると聞く。

さて、かように優れた本書に対し、あえて難をつけるなら私は次の3点をあげる。1つは、一部の写真でスケールが不明確であり、初心者には話題の対象物の大きさがイメージしにくいと思われる点である。第2は、写真に対応する解説が本文にない場合があったことである。第3に、一部の話題については、やや偏った前提が用いられたり、断定的に結論が導かれていたことである。山をフィールドとする研究では、研究者不足もあって未解決の問題も多い。研究・教育者の卵たる高校生・大学生が入門の1冊として本書を手にするを思うと、著者の主張とは切り離して当該分野の実状を紹介してもよかったのではないかと私は感じた。

本書がどのような年齢と職業の人たちに購入されてきたのか私にはわからないが、今後も、山に関わる1人でも多くの方に読んでいただきたいと思う。山登りの機会をもたず、日ごろは下界から山を眺めるだけという人だっただけかまわない。本書や、本書の姉妹本として著者が以前にまとめた「山の自然学入門」(古今書院：共著)と「日本の山はなぜ美しい—山の自然学への招待」(古今書院)を通じ、山の自然を暖かく見守ることのできる人たちが増えてゆくならば、それは山を研究対象とする全ての学問の底辺を広げることにつながるし、環境保護の思想を育くむ点でも望ましいことだからである。

[補遺] 著者の新刊本「山歩きの自然学」(山と溪谷社；1,800円税別)が本評の脱稿後に出た。解説文はほぼ「山の自然学」そのままながら、写真の多くはプロ・カメラマンによる大型版に差しかわられた。また各ページ下部には専門語の短い解説や参照すべき地形図幅名が加えられた。価格は少々上がったが、この本は先の私の注文の2つに応じてくれるものになった。新しい写真からは実に多くの情報を読み取ることができ、写真を読む楽しみが加わった。
(地震地質部 荻谷愛彦)